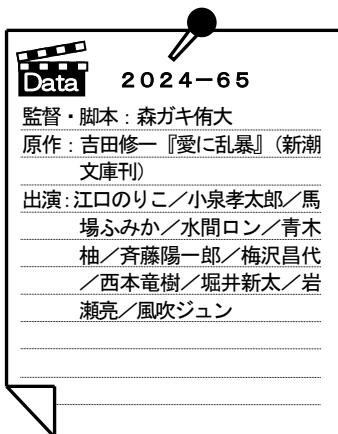




みどころ

“仏頂面”はあまり良い言葉ではないが、“とことん怪演”が目立つ女優・江口のりこについては、そんな形容詞が“褒め言葉”としてピッタリ！他方、人間の業（サガ）を鋭く炙り出していく作家・吉田修一の原作は、事件性が強いから、映画化にピッタリ！

しかし、殺人もなく、レイプもなく、“母屋”と“離れ”で仲良く暮らす(?)夫婦と嫁姑物語にどんな事件性が・・・？それは『愛に乱暴』という風変わりなタイトルに濃縮されているから、それに注目！

弟が自民党総裁選挙に立候補なら、俺だって堂々と仏頂面女優と対峙！小泉進次郎の兄・小泉孝太郎もそう気張ったようだが、愛に乱暴な“女の怖さ”に対して、何とも単純細胞なサラリーマン亭主の姿には啞然。

エンディング風景からあなたは何を思う？必ずしも私たちが住む日本国は平和で豊かな国ではないのかも・・・？

■吉田修一の原作、江口のりこの主演なら、こりゃ必見！■

吉田修一原作の小説を映画化した作品は多いが、そのうち私が鑑賞した『悪人』(10年)、『シネマ 25』(210 頁)、『さよなら溪谷』(13 年)、『シネマ 31』(24 頁)、『怒り』(16 年)、『シネマ 38』(62 頁)の 3 本は、それぞれ大傑作だった。他方、ほとんど出づっぱりで本作の主演を張っている女優・江口のりこはいわゆる美人女優ではなく、本来は味のある(クセのある?)助演がお似合いの女優だ。つまり、パンフレットにある秋本鉄次氏(映画評論家)の『江口のりこ独特の“仏頂面・ストレス顔”が決壊する時!』と題されたレビューで表現しているとおりの、仏頂面女優だ。

私がそんな女優・江口のりこに興味を持ったのは、『戦争と一人の女』(12 年)、『シネマ

30』199 頁)を見た時から。同作は寺脇研の企画、井上淳一の監督、荒井晴彦の脚本によって、「見たい映画がないのなら自分たちで作ってしまおう」と考え、『墮落論』で有名な坂口安吾のニヒリズム小説(?)を原作として映画化したものだ。井上淳一は亡き若松孝二監督の弟子だから同作の狙いは最初から明らかだが、私は同作で元娼婦の役で主演した女優・江口のりこをじっくり鑑賞し、冒頭のベッドシーンをはじめとするその大胆な演技に感激した。とりわけ、「天気の良い日には『お道具』を日光浴させなくちゃ」と言いながら着物の裾をめくるシーンにはビックリさせられたものだ。本作は、そんな吉田修一の原作を、そんな江口のりこの主演で映画化したものだから、こりゃ必見!

■□■ “母屋” と “離れ” で同居! この設定の是非は? ■□■

私は若い頃から不動産に興味が強かった。そしてまた、家賃派ではなく、持ち家派だったから、弁護士登録をした 25 歳の時には、奈良県生駒郡斑鳩町の法隆寺駅から徒歩 10 分のところに土地付き一戸建ての住宅を購入し、その後 10 回近く引っ越しを続けてきた。

他方、私が吉田修一の原作を映画化した本作に興味を持ったのは、彼が殺人事件やレイプ事件等の生々しい問題を真正面から見据えながら、そんな事件に巻き込まれていく人間の業(サガ)を生々しくえぐり出しているためだ。そんなテーマが顕著だった『悪人』、『さよなら溪谷』、『怒り』に比べると、一見仲の良さそうな、また一見息子夫婦と姑が“母屋”と“離れ”で理想的に住み分けているような本作の設定は、意外なものだった。しかも、毎朝夫の初瀬(はせ)真守(小泉孝太郎)を会社に送り出すと同時に始まる、姑の照子(風吹ジュン)が住む母屋からの「ごみ出し」をする嫁・初瀬(はせ)桃子(江口のりこ)の甲斐甲斐しい姿を見ていると、この夫婦は、そしてこの嫁姑は“平和的に共存中”! そう思わせるに十分だ。しかし、いやいや、そこは吉田修一の原作。キリスト教の教えでは、愛が何よりの上位概念だから、『愛に乱暴』などという言葉は聖書にはないはずだ。したがって、そんなタイトルの本作は、一見母屋と離れで 2 世帯がうまく共存している家族の仲、そしてまた、一見仲睦まじく見える桃子と夫との夫婦仲の問題点をじっくり炙り出していくことになるのだろう。さあ、それが楽しみだ。

他方、母屋と離れという理想的な距離感で同居(別居)している真守の母(=姑)・照子役を演じるのは、私が若い頃から大好きな女優・風吹ジュンだから、これにも注目! 昔々東京都知事も務めた青島幸男氏は「意地悪ばあさん」役で一世を風靡したが、風吹が演じる姑・照子は一見いわゆる嫁いびりをするいやらしい姑ではないから、とりわけ、それに注目! もっとも、それにもかかわらず嫁 vs 姑の対立が根深く存在していることは、チェーンソーで床板を切った和室の地下に潜りこんだ桃子が、真守と照子の会話を盗み聞くシークエンスで顕著だから、それにも注目!

■□■ 小泉孝太郎と小泉進次郎。二人とも大勝負だが・・・ ■□■

来たる 9 月 27 日に実施される自民党の総裁選挙に、小泉進次郎議員(43 歳)がついに
出馬宣言をした。これによって、9 月 11 日現在、石破茂、小林鷹之、林芳正、河野太郎、

茂木敏充、高市早苗、加藤勝信、上川陽子ら 9 氏の候補者が出揃った。父親の小泉純一郎氏からは、「50 歳までは総裁選挙に出るな」と言われ続けていたにもかかわらず、彼が 43 歳で今回の大勝負に出たのは一体なぜ？

他方、同じく小泉純一郎氏の息子で、進次郎の兄である孝太郎は政治家ではなく俳優の道を選び、それなりの実績を重ねてきたが、今回の江口のりこ演じる桃子の夫、初瀬真守役はかなり複雑で、重みのある役だ。だって、真守はやっと桃子と再婚し今の幸せな家庭を手に入れているにもかかわらず、若い愛人・三宅奈央（馬場ふみか）を作った上、堂々と「子供ができたから離婚してほしい」と桃子に申し入れるという厚かましくも善良なキャラを演じなければならないのだから。

本作のチラシには「人間の複雑な感情とその裏に隠された本質を鋭く炙り出してきた著者が、本作では愛が孕むいびつな衝動と暴走を描く。」と紹介されている。また桃子の「私ね、わざとおかしいフリしてあげてるんだよ。」のセリフが記載されているが、さて、そのココロは・・・？映画ではよく“怪演”という言葉が使われるが、まさに本作に見る江口のりこの演技はそれ。江口は本作全編を通じて出ずっぱり状態の中で桃子の心理状態を実に巧みに表現し続けている。そんな江口の演技を見、そのセリフを聞いていると、男の私としては「女は怖いな」としか言いようがない。桃子が愛人のマンションに大きなスイカを手土産に乗り込む姿や、チェーンソーを購入して、いざ“お仕事”にかかる姿を見ると、こんなレベルの女優・江口のりこに小泉孝太郎ごときの俳優が太刀打ちできるはずはない。そう思うしてしまうのは仕方ないだろう。なるほど、これなら本作には殺人事件もレイプ事件も登場しないけれども、吉田修一原作らしい人間の本性や業（サガ）をあぶり出す作品になっていること間違いなし！

■□■ごみ捨て場の不審火は？買い物風景は？あの SNS は？■□■

2024 年 4 月に弁護士 50 周年を迎えた私は、約 40 年間都市問題をライフワークにしてきたが、日本の高度経済成長の中で生まれた団地では、コミュニティ維持のためのさまざまなルールが生まれてきた。ごみ捨てもその中の 1 つだが、「たかがごみ捨て」ではないことに要注意だ。本作は冒頭の火事のシーンに続いて、桃子たちが住む住宅地（団地）のごみ捨て場で不審火が発生しているとして警察官が近所に注意してまわるシーンが登場するが、その犯人は一体誰？また、当然ながら本作には、桃子が近くのホームセンターに買い物に行くシーンが登場するが、そのレジ処理をする若い男性は日本語がたどたどしいから、きっと外国人？またひょっとして、この男性は、ごみ捨て場でタバコを吸っていたあの若い男と同一人物？なぜ森ガキ侑大監督は、本作にそんな外国人が登場するシークエンスを用意しているの？

他方、本作で興味深いのは、桃子が SNS でお花柄アイコンの妊婦アカウントを時折チェックしていること。こりゃ一体ナニ？私にはさっぱりわからないが、その投稿によると、お花柄アイコンの女性は独身で、お腹の子の父親は既婚者らしい。しかし、男が妻と別れ

て自分と一緒にしてくれると無邪気に信じているようだから、余計にこりゃ一体ナニ？ 桃子がこれをチェックしている姿と、香港出張から帰ってきたばかりの真守のキャリーバッグを開いた桃子が、丁寧に畳まれた衣類が詰め込まれているのを見てビックリする姿を見ていると、真守の浮気はすでにバレバレなのかと思っていたが、意外にも・・・？

2024 年 4 月で弁護士 50 周年を迎えた私は、不倫を理由とする離婚事件をたくさん処理してきたから、本作のそんな展開にも免疫があり、慣れっこだが、一般の人々には本作に見るこの展開は殺人事件やレイプ事件と同じような事件性を持った特殊なものかもしれない。本作は江口のりこの怪演が続く中、そんなストーリーがいかに面白くも面白くないのにアレコレと配置されているので、それに注目！必ずしも、愛は優しいものではなく、まさに愛は乱暴！？

■□■ピーちゃんってナニ？飼ひ猫だとばかり思っていたが？■□■

敷地内に L 字型に立つ 2 階建ての母屋と平屋建ての離れで暮らす初瀬家の 3 人が、東京 23 区内にいいのかそうでないのかはわからないが、都市問題を 40 年間ライフワークとしてやってきた私には、この建物は 2 つとも将来的に取り壊される運命にあることは明らかだ。相続の絡みで建て直しになるのか、それとも大手デベロッパーに売却されて大きな区画の土地にまとめられ、大きなマンションが建てられるのかはわからないが、今ドキ東京 23 区内やその近郊で母屋と離れで 2 世帯が暮らし続けることなど不可能なことは明白だ。

ちなみに、本作のパンフレットのプロダクションノートには、「理想の初瀬家を見つけるまで」のページがあり、そこでは敷地と建物のレイアウトが詳細に解説されている。そこで注目すべきは、本作ラストに登場する離れの解体風景は本作の撮影のためだけでなく、ロケ地として選定された当初から、この建物は撮影終了後解体されることが予定されていたということだ。なるほど、それなら撮影費用も節約できるし、本作のクライマックスとなる座敷の床下を惜しげもなくチェーンソーで切ることもできるわけだ。チェーンソーで床板を切ることの合理性(?)はそれによって納得できたが、なおわからないのは、なぜ桃子がそんな行動をとったのかということ。それについては、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

本作では導入部から再三桃子が“ピーちゃん”と声をかけながら庭の周辺や家の周辺を探し回るシーンが登場する。転がり込んできた飼ひ猫に餌をやる桃子の姿を見ていると、このピーちゃんは桃子が飼っている猫のことだと誰しも考えるはずだが、さてピーちゃんとは一体ナニ？そんなこんなをじっくり考えながら見れば、本作はかなり怖い映画だということが少しずつわかってくるだろう。

2024 (令和 6) 年 9 月 11 日記